

♪エディットピアフ「アコーディオン弾き」その5 (承前) ♪

3番の歌詞をご覧ください。シャンソンがお贈りする「3幕もののメロドラマ」もいよいよ終幕です。(以下引用)

3番クープレ：

街の女は悲しく
向こうの街角に立つ
女たちはしかめっ面
男たちは覇気がない
彼女が野垂れ死んでも仕方のないこと

彼女の男はもう帰って来ないから
美しい夢には本当にお別れ
彼女の人生は完全におしまい
なのに哀れな彼女は
ブイブイに足を運び
そこでは別のミュージシャンが
一晩中演奏しているのだ (引用ここまで)

解説：主人公の愛人であるアコーディオン弾きは戦死してしまっただけで、彼女は盛り場に立ち続けますが、風俗街には元気がありません。この曲が発表された1940年はパリが陥落してフランスが半分ドイツになってしまった年です。当時の世情が反映されています。それでなくても第1次世界大戦、普仏戦争とフランスは戦争ばかりしていますから、人が死んで国が疲弊することはフランス人には日常であり、国民的記憶に染み付いています。

最後で彼女が 通うブイブイは場末の安酒場のこと。ブイブイという名称の語感に凄まじいものがあります。いかにも体に悪そうな酒で飲んだくれている感じがします。このあと、最後のルフランでクライマックスを迎えます

3番ルフラン：(以下引用)

彼女はジャヴァを聴いて…
…彼女はジャヴァを聴いて
…彼女は目を閉じ
…がさがさした長い指が
彼女に入ってくる 肌で知っている
下のほうを 上のほうを
喚きちらしたい
軀(からだ)で感じる
そして忘れてしまうために
彼女は踊りだし、回りだす
音楽の調べに合わせて (引用ここまで)



◎ポップ・フランセーズ

解説：ルフランの歌詞もうわごとの様になり、1番ではうっとり音楽を聴いていた彼女も狂った様に踊り始めます。ここで音楽は演奏だけになり、ひとしきり超高速のジャヴァをアコーディオンが奏でると「やめて！音楽をやめて！」とピアフが一声叫んで曲が終わります。文字通り大見得を切ります。本当の切り台詞。正にシャンソンの演劇性が発現する一瞬に聴衆は立ち会うのです。

(次回で、この項は終わります)

筆者のウェブサイト「ポップ・フランセーズ」(<http://lapopfrancaise.com/>)にも紹介とCD購入ガイドがありますので御参考になさってください。(続く)